「パフォーマンス」のマイナス値派生義について

中　道　知　子

Negative Meaning of “pafoomansu”

NAKAMICHI Tomoko

1　「プラス値派生」と「マイナス値派生」について

「熱がある」または「熱を持っている」という文の意味は、人間の体温についてという文脈において＜平熱より高い体温がある＞という意味になる。例えば、下記のような例文においてである。

1　熱があるので、きょうは欠席いたします。

この現象について、現象そのものを指摘した国広は「プラス値派生」と名づけた（国広哲弥1997　P.69）。

国広によれば、プラス値派生のしくみはトートロジーによる意味派生である。「熱」は人間を含めて動物ならすべてが持っているものであり、「熱をはかる」と言った場合にはその意味になる。それをわざわざ「ある」ということはトートロジー（同義反復）であり、そこから推論による派生義として＜普通以上の値＞という意味が生じると説明している（国広1997、国広2006）。国広は、多義派生の型の種類に言及するに際して、このプラス値派生を、推論的派生義と名づけている。

九　推論的派生義

前項までの派生義（※引用者注）は、すべて現象素が元にあり、それをどう捉えるかによって生じるものであった。ここでいう推論的派生義は出発点が現象素であることもないこともあるが、現象素の捉え方の違いではなくて、世界知識に基づく推論という過程がはいる点でこれまでの派生とは異なっている。（中略）「熱」を人体の体温に用いて「熱がある」と言えば、

＜平熱より高い体温になっている＞

という意味である。なぜ単に「熱」と言うだけで平均値より高い温度をさすのかというと、

この裏には同義反復＜トートロジー＞という現象に基づく推論が働いているためである。人体には平熱という熱があるのはあたり前のことであるので、そこであえて「熱がある」と言うからには＜普通以上の熱＞という意味に取らない限りこの表現は情報量がゼロということになる。しかし人間は情報量のない発言をわざわざするはずがないという予備知識があるために有意味な＜普通以上の熱＞と解釈することになる。類例として「実力」＜平均以上の実力＞、「人格者」＜立派な人格を持った人＞などがある。（国広2006　P.17f）

※引用者注　一　心的視点の位置　二　アスペクト多義　三　焦点化　四　具象化転用　五　比喩的転用　六　提喩（シネクドキー）　七　換喩（メトニミー）　八　時空間推義　（国広2006　P.12～17）

さらに、 国広は、「プラス値派生」と反対の方向の意味派生として、「マイナス値派生義」について述べている。

国広があげる「マイナス値派生義」を持つ語は、「所見（医学用語の場合）」と「問題」「感情的」である。国広によれば、「所見」がマイナス値を派生するプロセスは次のように説明されている。すなわち、「所見」の本来の意味は医者が患者を診察したり検査データを見たりして下す判断を指しその点では中立的な語であるのだが、診察の目的は患者の悪いところを発見することであるから「所見あり」というのはすなわち「異常あり」ということになるという推定が働き、そこから、「所見」が＜異常＞という意味を派生させる。また、＜異常＞というマイナス義からさらにメトニミーにより＜異常ありと診断される身体部位＞という意味に用いられることもある。国広（2006）には次のような用例があげてある。

（国広2006における用例番号は17）

「はあ、えーと、この頭蓋骨を正面から撮った写真では、ですね」

「うん、どこに所見があるんだ？」

「・・・ここ、」ここですね、ここに骨折線があります」（浜辺祐一『救急センターからの手紙』）

（国広2006における用例番号は18）

がんの一部をとって顕微鏡でみて、特徴的な所見をひろいだします。その作業を、多くのがんについておこない、こういう所見があればがんだという基準をつくりました。（近藤誠『がんは切ればなおるか』）

「問題」という語については、「それは問題だ」というときに＜無視できない問題＞という意味になったり、「問題視する」「問題児」という用法をあげ、「感情的になる」という語が＜理性を失った状態になる、怒る＞という意味を派生させることを指摘している。

2 「パフォーマンス」のマイナス義

本節では、外来語「パフォーマンス」が、マイナス義を派生していることに言及する。国広は、プラス値派生義もマイナス値派生義もともに推論による派生義であって曖昧性を含んでいるので実例はあまり多くないと指摘している。そしてその数少ない実例として、前節のように、「所見」「問題」「感情的」がマイナス値派生義を持つことを指摘している。筆者は、これら国広が挙げた実例に、「パフォーマンス」をつけ加えたいと思う。

2－1 辞書の記述

国語辞典等における「パフォーマンス」の意味記述は次のとおりである（各辞書の語義番号等はもとのままではなく便宜的に統一した）。

ここでは、多少なりともマイナス的な意味に言及しているのは、『新明解国語辞典第6版』だけであることが見られる。同書の、「俗受けをねらったとしか思えない行動」という説明は、確かにマイナス義に言及しているが、一つの派生義として扱っているとは言いがたい。「パフォーマンス」のマイナス義を記述するとすれば、＜実効性を問わない（伴わない）形だけの見せかけの行為＞というようなものになるが、ここまではっきり記述してある辞書はない。

『新明解国語辞典』第6版

〔performance＝行為。演技。公演〕一定の機会をとらえ、特定の行為者がなんらかの方法で他の参加者〔見物人・聴衆をも含む〕に影響を及ぼす力を持つ行動のすべて。〔広義では、俗受けをねらったとしか思えない行動をも指す。例、「――ばかりが目立つ政治家」〕「路上――・宙釣り――」

『明鏡国語辞典』

(1) 音楽・演劇・舞踊などを上演すること。また、その演技。

(2) 規制芸術の枠組みに収まらない、身体的動作・音響などによって行う実験的な芸術表現。一回的・即興的・偶然的な要素を重視する。

(3) 人目を引くために行う表現行為。「選挙をにらんで派手な――を行う」

(4) 性能。また、効率。「コスト――が高いデジタルカメラ」

『岩波国語辞典』第6版

(1) 演奏・演技・上演。特に街頭などで行う、肉体を用いた前衛的な表現。

(2) 人目をひこうとする行為。

(3) 性能。できばえ。「コスト――」（要した費用に対する成果の割合）

『大辞林』第3版

(1) 実行。遂行。

(2) 演奏。演技。

(3) 身体を使って表現する行為。特に現代芸術で、演劇やダンスなどのジャンルを超えて行われる肉体を用いた表現形態。

(4) 街頭などで突発的に行う演劇表現。

(5) コンピューターで、処理を実行する能力。性能。

『三省堂国語辞典』第５版

(1)〔現代芸術で〕演技・演奏などに、肉体を用いた表現形態。

(2) 突発的・見せ物ふうに行う演劇表現「街頭――」

『日本国語大辞典』第２版

(1) 演劇・音楽・舞踊などを、上演すること。特に、身体を用いて表現を行う芸術形態をいう。また、一般に、身体を用いた表現。＊欧米印象記（1910）＜中村春雨＞プリンストン雑記・九「又は野外パフォーマンスなどをやる」

(2) 現代美術で、作者の製作行為の過程、また、行為そのものを作品とするもの。

(3) 生成文法で、話し手の言語能力のさまざまな表われをいう。言語運用。

(4) 性能。機能。また、効率。「旧型でもパフォーマンスはいい」「コストパフォーマンス」

外来語辞典類の記述は、次のとおりである。

『外来語と英語のズレ』

「パフォーマンス」は収録されていない。

『基本外来語辞典』

パフォーマンス【英　performance】

①身体による表現。公演。実行。　例：「パフォーマンス - アート」

②目標達成。目標遂行。例：「コスト - パフォーマンス」

辞書ではないが、石綿（2001）は、東野芳明「パフォーマンス寸考」（朝日新聞1984年４月20日）として次のような記述を引用している。

（前略）最近よく耳にするパフォーマンスという言葉には、演劇や舞踊の「上演」、音楽の「演奏」といった古典的な意味合いとはずいぶんちがったニュアンスがあるようなのだ。（中略）一言でいえば、肉体を通した表現活動ということになるが（中略）なんでもない日常の延長、あるいは日常のなかのちょっとした亀裂として展開されるということだろうか（石綿 2001　P.92）

ここでもマイナス義については言及されていない。

上記のように、各種辞書類の記述に見る限りにおいては、「パフォーマンス」の語義には、めだったマイナス義はないように見える。しかし、現実の用法においてはどうだろうか。実際の使

用例において、「パフォーマンス」という後は、マイナス的（否定的）な意味をもって使われていると考えたほうがよい場合がある。

２－２　新聞記事の用例

本節では、「パフォーマンス」がマイナス義として用いられた例を、新聞記事の用例によって示す。語義がマイナス値を持っているという判定の下し方は、この語が、「～に過（す）ぎない、～でしかない、単なる～」という文脈で用いられている場合に、

＜実効性を問わない（伴わない）形だけの見せかけの行為＞

というマイナス義であると判断することにする。もちろん、この文脈以外にもマイナス義としての用例があると考えられる。たとえば、「パフォーマンスとしか言いようがない」という用法も入るだろう。しかし、判定を明確かつ単純にするために、とりあえず上記文脈に限って見ることにする。それによっても、「パフォーマンス」にマイナス義が存在するということの論証は左右されない。

上記のような用法の例について、朝日新聞データベース1984年、1994年、2004年という10年毎に各１年間分を検索して、次のような結果を得た。

「単なるパフォーマンス」2004年４例、1994年１例、1984年ゼロであった。各年に付き１例示す。

１　ダンスショーや有名人応援も　参院選・投票率アップ作戦　／千葉

選挙戦の後半、選挙管理委員会や関係各陣営は、有権者に投票に行ってもらうため、あの手この手の「作戦」を展開する。単なるパフォーマンスでは有権者は逆に冷めてしまう今のご時世。訴える側のセンスが問われそうだ。（2004年７月４日 朝刊）

２　懸命に交渉している、という姿勢を国民に示すことは、対米譲歩に対する国内の批判をかわす意味で村山政権にとっても好ましいことだ。ただ、結果を伴わなければ、単なるパフォーマンスに過ぎない。（1994年９月26日 朝刊）

「パフォーマンスに過（す）ぎない」2004年３例、1994年１例、1984年ゼロであった。各年に付き１例示す。

３　民主党内にはピケなど物理的抵抗を求める声もあるが、やはり長期的な抵抗には、それに足る大義名分が必要になる。「パフォーマンスに過ぎないのなら、やめた方が得策」との声も出始めた。（2004年６月１日 朝刊）

４　（２と同例）懸命に交渉している、という姿勢を国民に示すことは、対米譲歩に対する国内の批判をかわす意味で村山政権にとっても好ましいことだ。ただ、結果を伴わなければ、単なるパフォーマンスに過ぎない。（1994年９月26日 朝刊）

「パフォーマンスでしかない」2004年ゼロ、1994年１例、1984年ゼロであった。

５　中井石男副会長は「本気で反対なら、離党の前に、増設を推進している地元の敦賀市にまず陳情すべきだ。集団離党は、地域振興策の条件を引き出すパフォーマンスでしかない」

と話している。(1994年２月１日朝刊)

3　まとめ

「パフォーマンス」という語は外来語としては一般社会にかなり定着している。文化庁の調査結果にもそのことは示されている。『平成14年度国語に関する世論調査』によれば、「パフォーマンス」については下記のような結果がある。

認知率（その語を「見聞きしたことがある」と答えた人の比率）：92.7%

理解率（その語の「意味が分かる」と答えた人の比率）：76.2%

使用率（その語を「使ったことがある」と答えた人の比率）57.9%

これによると、認知度が高い語である。

しかし、この語の意味の理解という点については、一つの疑問がある。すなわち一般社会において人々は、「パフォーマンス」という語をどういう意味として理解しているのだろうか、ということである。

上記国研調査においては、「パフォーマンス」の意味は、＜実行、功績、公演、人前での表現行為＞であるという前提である（これは、２－２で例示した各種国語辞書にある意味と同じである)。国研調査においては、どういう意味で理解しているかは質問項目ではないため、各インフォーマントが、この語の意味として、＜実行、功績、公演、人前での表現行為＞という意味と本稿で筆者が言及したようなマイナス義とを、どのように意識しているのだろうかということは、興味深い問題であり、今後の課題の一つである。

次に、「パフォーマンス」と「演技」の関係である。「演技」にもマイナス義的な用法がありそうに思われる。この点については、『新明解国語辞典第６版』が「パフォーマンス」の語義説明同様に言及している。各国語辞書において、「演技」の語義説明は、「パフォーマンス」の語義説明と連動して変更する点がある可能性が考えられる。このことも、今後の課題である。

参考文献

石綿敏雄編（2001)『外来語の総合的研究』東京堂出版

木下哲生（2002)「英語と意味のずれがある外来語」『現代日本語講座第４巻語彙』明治書院

国広哲弥（1997)『理想の国語辞典』大修館書店

――――（2006)『日本語の多義動詞―理想の国語辞典Ⅱ』大修館書店

佐藤　弘（1994)『外来語と英語のずれ』八潮出版社

文化庁（2003)『平成14年度　国語に関する世論調査』国立印刷局

辞書

『明鏡国語辞典』2002　大修館書店
『新明解国語辞典』第６版　2005　三省堂
『岩波国語辞典』第６版　2000　岩波書店
『大辞林』第３版　2006　三省堂
『三省堂国語辞典』第５版　2003　三省堂

（2007年９月28日受理）